



「間違い」と「違い」のあいだ

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子

うのだよね」
どうでしょう。映画を観て感動しないのは間違いなのでしょう。みんなが感動しているのなら、感動しなければいけないのでしょうか。感動を強制されたら、感じ方までみんなと合わせなければいけなくなってしまうです。

○「違い」を認める指導・行動編

このような状況になってしまっているのは、学校教育にも問題がありそうです。何が「違い」を認めない心情を養ってしまっているのでしょうか。普段の指導の姿勢を振り返る必要があります。

クラスには内気な子ども、積極的な子どもなど、いろいろな子どもがいますね。それなのに、どの子どもにも同じように行動させていることはないでしょうか。

あいさつの指導を例にしてみましょう。内気な子どもは、なかなか声に出してあいさつをすることができないと思います。その場合は、目を合わせるだけでもよしとしたいものです。目を合わせて笑みを浮かべればそれもよし。おじぎをすればなおよし。そして、ちゃんと声を出してあいさつできれば、これはもう申し分ありませんね。

そして、前の日よりよくなれば、その場、その時を逃さず喜んだりほめたりするのです。「おっ。目が合うようになった。

○「違う」とはいけないうん?」

今年の成人の日のことです。テレビで若い人の座談会がありました。そのなかで、出演者のAさんの話がとても気になりました。

Aさんはある時、友達数人と、映画を観ての感動を語り合っていたそうです。Aさんは、「私は特に感動しなかったわ。なぜなら……」と話すと、「Aさんはおかしい。みんなが感動しているのに、変よ」。そしてさらに、「場が白けるから黙って」と言われたとのこと。Aさんは怒りの気持ちを抑えきれないようでした。

ある先輩校長の言葉です。「『間違い』と『違い』は違うよ。『間違い』は正さなければいけないが、『違い』は尊重しなければいけないのだ。ところが、先生方は往々にして、『違い』を正してしま



違いを認める
指導とは
どういう
ものだろう

子どもと動き回れる。子どもと感覚がびったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

たね。うれしい」そんな感じでした。

一方、一向に変わらない子どもがいたかどうかという点で、その場合は、変容を見せている子どもを取り上げ、朝の会、終わりの会などで、喜んだりほめたりします。そして、どの子どもに対してもその子なりの成長を願うようにします。

○「違い」を認める指導・学習編

学習の場面ではどうでしょう。指導する場合、本時目標や学習内容はあらかじめ考えて授業に臨むと思います。発問も吟味するでしょう。それは授業が漂流状態になるのを防ぐという意味で大切なこととです。しかし、自分がよしと思う発言しか受け入れず、外れた発言を無視したり、誤答扱いしたりすることはないでしょうか。それでは、子どもは教師の思いを押し量り、それに沿った発言しかしないようになります。また、教師の意図がわからない子どもは発言しなくなりま

うになりますし、他の子どもたちも、友達のことを大事にしようとするようになります。

ここで大切なのは、「友達の思いを大切にすること」とは、「友達の思いを批判しない」ことではないということです。友達の意見や思いに反対したり批判したりしながらも、相手の人格は尊重することが重要です。「議論し合ったから、お互いの思いや考えが深まった。それは友達のおかげだ」。そうした心情を養うことが、多様性の理解につながります。

○「違い」を認める指導・生活編

では、日々の学級生活はどうでしょう。三十人の子どもが一緒に生活していれば、どんな仲よし集団でも、トラブルは発生するでしょう。そんな時、教師の価値観を押しつけてはいないでしょうか。子どもには子どもなりの思いがあるはずで、まずはそれを引き出し、受け止めるようにしたいもの。そして、どの子に對してもその思いに寄り添うようにしたいものです。「あつ、そうか。それで悔しくなっちゃったのか」「なるほど。それで我慢できなくなっちゃったのだね」「このように、教師は子どもの心を映し出す鏡になりましょう。子どもは、鏡に映った自分の姿を見て、いけなかったところがわかり、反省するものです。



中には、そうならない子もいるでしょう。それでも、できるだけ子ども同士で考えさせ、自分自身で問題解決できるような方向で努力したいものです。

教師の受容範囲が広がれば、子ども同士の受容範囲も広がります。逆に、教師の受容範囲が狭ければ、子ども同士も許し合えない気持ちになるでしょう。

「人はそれぞれ違うのだ」。自分とは違う多様性を受け止め、認め合うことにより、人間探求の心を養えるといいですね。

そして二十歳になったときに、笑顔で成人式を迎えられるようにしたいものです。